

# 私は宇宙を目指す

理科系女子

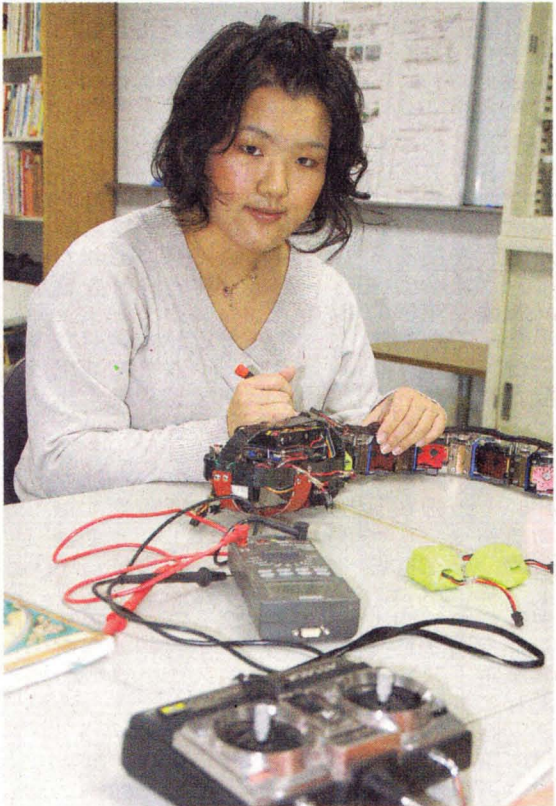
## リテラシーのすすめ

山口東京理科大学女学生の日々

<上>

「父が空なら、わたしは宇宙を目指す。その夢を追いかけてみたい」。山陽小野田市大学通にある山口東京理科大学工学部機械工学科1年の大森未奈さん(19)。リケジョ(理科系女子)の一人として、自らの将来への明確な目標を定め、勉学に励んでいる。

工学部機械工学科  
大森未奈さん



「数学や物理を勉強すると新しい発見がある。食わず嫌いでなく勉強してほしい」と後輩にアドバイスする大森未奈さん

## 父の後追い自然と「理系」へ

小学生時代に明石海峡大橋の見学に行き、その構造の美しさのとりこに。「私もあんな橋を作ってみたい」と考えるようになった。さらに、大学で航空工学を学び、航空自衛隊の整備幹部として働く父親の章さん(47)から科学技術やモノづくりの楽しさを教えられ、「将来は理系へ」は自然な流れだったという。

昨春、静岡県浜松市の興誠高校から山口東京理科大学に進学。父親の勤務の関係で全国各地に住んだが、山口県、山陽小野田市は初めての土地。「大学の周囲に遊ぶ場所もなく、勉強に専念できる環境」と屈託なく笑うが、学生生活には満足しているという。

稲垣詠一教授の研究室で、ウナギ型ロボットの制作などを通して機械工学の基礎を学ぶ。「ウナギはきれいな波を描きながら泳ぐ。その波を再現するためにモーターと板羽根をどう配置するか、プログラミングに

よって違った動きをする。その応用を考えるのも楽しい」。

ロボットづくりに没頭するうち、宇宙や宇宙工学への関心が高まった。「宇宙飛行士は宇宙に一度行ったら終わりかもしれない。それなら自分の代わりに宇宙に行ってくれるロケットや衛星を作ろう」と考え始めたという。

同大は、教員が学生の学習や生活面を指導するチューター制を取り入れている。教授らが学生一人一人を担当して大学生活の悩みなどの相談に乗っている。大森さんは「1年生が教授と1対1で話をするなんて、ほかの大学では考えられない。少人数制の授業も参加しやすく、活気にあふれている」ことが魅力という。一方で、男子学生が多い環境で、女子学生への言葉遣いや接し方に、「同士のような扱いをされ、女子として見られていない」との不満もあるようだ。

大森さんには海外留学の希望がある。英語力に磨きをかけようと、英語能力テスト「TOEIC」受験の勉強にも励む。「理科系バカではなく、オールマイティーに何でもできる人材に

なりたい」。将来は「博士課程まで進み、大学で研究職に就きたい。いまの自分たちが持つものを次世代に伝え、育てるのも私たちの役目。こんな考えができるようになったのもこの大学のおかげです」と、視線は前を向く。

現在の日本は、科学技術を支える理科系人材に冷たい「理科系冷遇社会」といわれる。さらに子どもたちの理科離れも指摘される。そんな風潮を打ち破り、優秀な科学技術者を目指す女子学生たちの姿を、山陽小野田市の山口東京理科大学で追った。